

保育所実習における学生の自己評価と実習評価の関係

A Study of Comparison between Student Self Evaluation and Evaluation with Nursery school.

牛 込 彰 彦
(こども学科 教授)

要旨 本研究は、保育士養成校における実習の充実を図るために、保育実習生の自己評価と実習先からの実習評価を比較することによる分析を行った。その結果、保育実習生が自己評価として実習前に低く評価した項目は、実習先からの実習評価も低い傾向がみられ、保育実習生は、ある程度自分の能力に関する自己評価が出来ているという結果が得られた。このことは、実習指導内容に直接反映するもので、その項目に関する指導が十分でないことを物語っている。それらの項目に対する検討を加えた。

【キーワード：保育所実習 自己評価 実習評価】

I. はじめに

保育士資格を取得するためには、学内での講義の他、実際の保育や養護の現場における実習が必須となっている。保育実習ⅠおよびⅡとして270時間の実習を現場で行うこととなる。実習にあたって、事前および事後指導として時間を確保し指導しているが、十分な指導が出来ているか否かは、現場からの評価が物語ることとなる。本研究では、保育所における実習を取り上げ、実習先からの評価（以下他己評価という）を分析し、本学における保育所実習に関する指導の弱点を知り、今後に役立てるという目的を持つ。また、実習前に学生が行った実習評価（以下自己評価という）を分析し他己評価と比較することによって、本学学生の自己認識の傾向を知り、今後の実習指導に役立てるという目的も併せ持つ。

II. 方法

調査対象：平成22年度の本学における2回生57名（有効回答を得られた者のみ）。

調査対象の学生はこども学科乳幼児保育コースに所属し、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状の取得を目標としている。本学では、1年次9月に幼稚園教育実習（前期：1週間）、1年次2月に施設実習（11日間）、2年次5月に幼稚園教育実習（後期：3週間）、2年次7月に保育所実習（前半：11日間）、同9月に保育所実習（後半：11日間）を行っている。

材料：図1は、本学で使用している保育実習評価表である。評価は、4つのカテゴリー（Ⅰ～Ⅳ）

と15の下位項目から成り立っている。

I 実習態度

- 1 仕事に関して責任感や積極性がある（以下責任感という）
- 2 明るさや協調性（以下明るさという）
- 3 挨拶や正しい言葉遣いができる（以下あいさつという）
- 4 勤務上の諸注意を守る（以下勤務という）

II 子ども理解

- 1 発達段階の理解（以下発達段階という）
- 2 子ども一人ひとりの個性の把握（以下個性の把握という）
- 3 子どもの友達関係の理解（以下友達関係の理解という）

III 保育技術

- 1 子どもとのかかわり方（以下かかわり方という）
- 2 適切な言葉かけや説明の仕方（以下言葉かけという）
- 3 周到な指導計画と遂行力（以下指導計画という）
- 4 教材や教具の準備と環境整備（以下教材の準備という）

IV 保育者としての資質

- 1 表情の豊かさや子どもへの愛情、思いやり（以下表情という）
- 2 情緒、感情の安定性（以下情緒という）
- 3 誠実さや明朗性（以下誠実という）
- 4 研究心、向上心や創意工夫（以下研究心という）

本研究では、学生が保育所実習に行く前の時期(2年次6月)において本評価表を用い自己評価を行った結果と保育所実習終了後、それぞれの実習先より返送された評価を材料として用いた。評価は15

の下位項目に対し5点法を用い、5点を一番高い得点とした。なお、データの一部に欠損があった場合は、そのデータを削除した。

保 育 実 習 評 価 表

保育所(園)名		所 長(園長) 名	印					
		実 習 担 当 者 名	印					
学 籍 番 号		実 習 期 間	前半：平成 年 月 日～ 月 日					
実 習 生 氏 名			後半：平成 年 月 日～ 月 日					
項 目			評 価	5	4	3	2	1
実 習 態 度	仕事に対して責任感や積極性がある							
	明るさや協調性							
	挨拶や正しい言葉遣いができる							
	勤務上の諸注意を守る							
子 ども 理 解	発達段階の理解							
	子ども一人ひとりの個性の把握							
	子どもの友達関係の理解							
保 育 技 術	子どもとのかかわり方							
	適切な言葉かけや説明の仕方							
	周到な指導計画と遂行力							
	教材や用具の準備と環境整備							
保の 育 資 者 質 と し て	表情の豊かさや子どもへの愛情、思いやり							
	情緒、感情の安定性							
	誠実さや明朗性							
	研究心、向上心や創意工夫							
総 合 所 見	総合評価		優 良 可 不可					

- ・項目別評価の基準：5－優れている、4－やや優れている、3－ふつう、2－やや劣る、1－劣る
- ・総 合 評 価：当てはまる評価に○をお付けください。

図1 本学の保育所実習評価表

Ⅲ. 結果および考察

1 他己評価

表1は実習先からの評価における項目別の平均であり、グラフにしたものを図2として掲げる。

表1 他己評価の項目別平均値

		他己評価
1－1	責任感	4.00
1－2	明るさ	3.77
1－3	挨拶	4.16
1－4	勤務	4.14
2－1	発達段階	3.70
2－2	個性の把握	3.54
2－3	友達関係の理解	3.54
3－1	関わり方	3.84
3－2	言葉かけ	3.53
3－3	指導計画	3.54
3－4	教材の準備等	3.81
4－1	表情の豊かさ	3.89
4－2	情緒	4.04
4－3	誠実さ	4.09
4－4	研究心	3.79

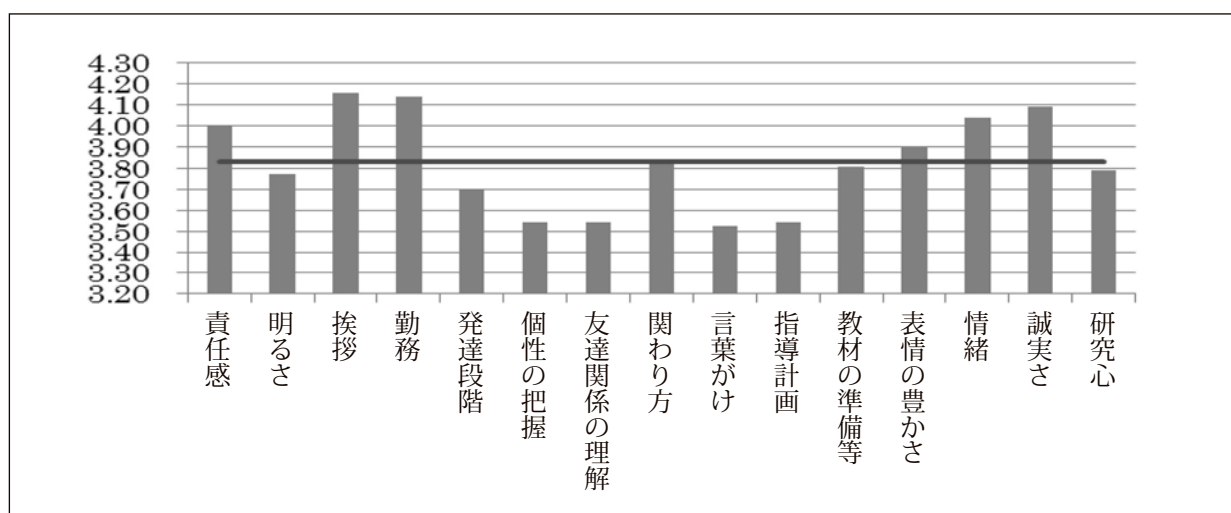


図2 他己評価の項目別平均値

他己評価の高かった項目順に並べ替えると、1-3 挨拶 1-4勤務 4-3誠実さ 4-2情緒 1-1責任感 4-1表情の豊かさ 3-1関わり方 3-4教材の準備等 4-4研究心 1-2明るさ 2-1発達段階 2-2

個性の把握 2-3友達関係の理解 3-3指導計画 3-2言葉かけの順になっている。各項目の平均値は、3.83であった。平均値よりも高いものと低いものを分けたものを表2として掲げる。

表2 他己評価における平均値よりも高かった項目と低かった項目

平均値よりも高かった項目	1-3 挨拶 1-4 勤務 4-3 誠実さ 4-2 情緒 1-1 責任感 4-1 表情の豊かさ 3-1 関わり方
平均値よりも低かった項目	3-4 教材の準備等 4-4 研究心 1-2 明るさ 2-1 発達段階 2-2 個性の把握 2-3 友達関係の理解 3-3 指導計画 3-2 言葉がけ

平均値よりも高かった項目及び低かった項目を4つのカテゴリー別に見ると表3になる。

表3 カテゴリー別に見た平均値との比較（割合）

	平均値より高かった項目	平均値より低かった項目
実習態度	75%	25%
子ども理解	0%	100%
保育技術	25%	75%
保育者としての資質	75%	25%

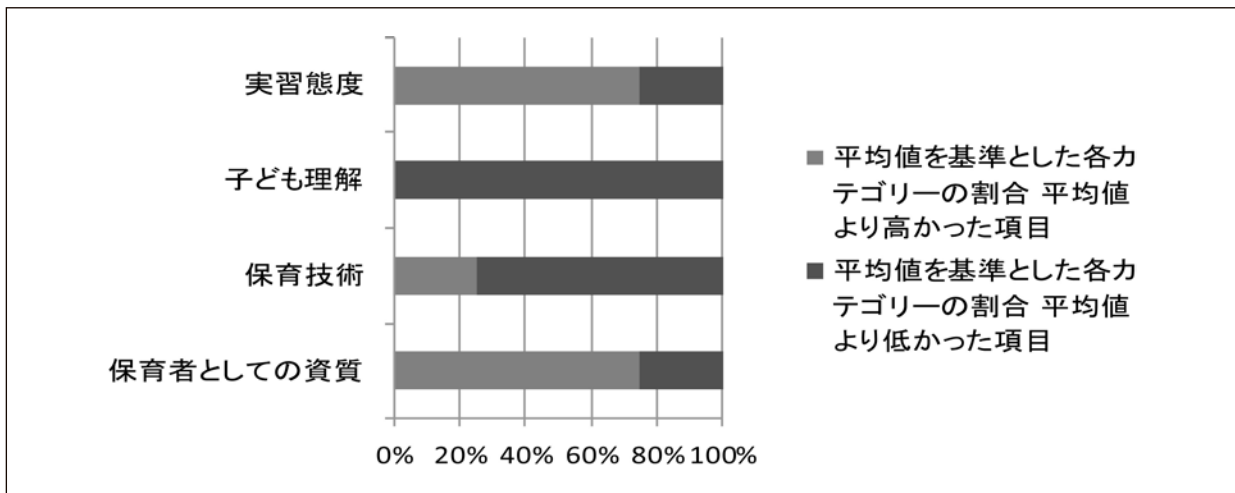


図3 カテゴリー別に見た平均値との比較（割合）

表3及び図3からわかるように、カテゴリーⅠの実習態度及びカテゴリーⅣの保育者としての資質は平均値よりも高かったものが75%を超えているが、カテゴリーⅢの保育技術においては75%、カテゴリーⅡの子ども理解に至っては100%が平均値よりも低い項目となっている。

この結果から、子ども理解及び保育技術のカテゴリーに関する指導の一層の充実が望まれると考えられる。

次に他己評価が低かった項目からいくつかを取り上げ、今後の実習指導にどのような工夫が可能か考えたい。

2-1発達段階であるが、本学の学生は1年生の9月に幼稚園前期/基本実習を1週間、2年生の5月に

幼稚園後期/応用実習を3週間経験した上で、保育所実習に臨んでいる。したがって、3・4・5歳の幼児に関しては少なからず、実際の幼児とのかかわりを通して発達段階も理解していると考えられる。しかしながら0・1・2歳の乳幼児に関する知識は、実感を伴った理解をする機会は少ないと考えられる。本学のシラバス（平成25年度）の中に「発達段階」という言葉はないが、「発達」という言葉は、113回登場した。そのうち59回は、「育ちと学びの心理学Ⅰ・Ⅱ」が占めていた。乳幼児の発達（段階）について学習するのは、「育ちと学びの心理学Ⅰ」「保育内容（健康）指導法」「育ちと学びの心理学Ⅱ」「保育内容（言葉）指導法」「乳児保育」が主なものである。「乳児保育」では「乳幼児期の心身の発達～認知の発達・人間関係の発達・言葉とコミュニケー

ションの発達・自己意識の発達～」が内容となっている。また、「育ちと学びの心理学」では「乳幼児期の発達～身体的機能、運動機能の発達・アタッチメント・情緒・自己・認知の発達・言語、社会性の発達・知的発達～」などが内容となっている。「保育内容（健康）指導法」では「子どもの心の発達」「子どもの体の発達1・2」,「保育内容（言葉）指導法」では、「乳幼児期の発達と言葉1・2」が内容となっている。このほかの講義でも乳幼児の発達に関する内容を取り上げている教科はある。シラバスから見た乳幼児の発達に関する講義内容を見ると、内容が重なっていることもうかがわれ、教員間で実習にお

いて発達段階の理解が不足しているという事実を共有した上で包括的に、かつ効率的に乳幼児の発達を捉えることが出来るような授業内容の検討が必要である。また、発達の講義を組み立てる上で、実習を取り入れたり、VTRの視聴、具体的な操作を通して理解したりすることなども効果的であると考えられる。以下に取り上げる資料（図4）は、保育内容（健康）指導法の講義の中で、幼児の手指の操作を実際に追体験しながら作成したワークシートである。実際に発達の違いによって、操作できる範囲が違うことに対して実感を伴って学ぶことが出来、後に行った定期試験における定着も良かった。

保育内容（健康）指導法			
	名前：		
	はさみ	おりがみ	手先
2歳半	1個…（ ）	2個…（ ）	2個…（ ）
3歳半	1個…（ ）	1個…（ ）	2個…（ ）
4歳半	1個…（ ）	1個…（ ）	2個…（ ）
5歳半	1個…（ ）	1個…（ ）	1個…（ ② ）
	①自分のイメージにしたがってはさみを使う事ができる	①両手の指先を協応させ、きちんと合わせ折りができる	①粘土を両方の手で丸めることができる。
	②一回切りができる	②簡単な合わせ折りができる	②細かな両手指の協応動作ができる
	③円を切ることができる	③指先や手のひらで押さえる	③粘土を、ちぎったり、延ばしたり丸めたりする
	④直線切りができる	④友達のものや本を見ながら折ることができる	④ビンのふたなど、自由に開けたり閉めたり、回すことを好むができない
		⑤折り紙はまねて角を合わせて折り込もうとする	⑤正しいもち方ではしが使える
			⑥上までボタンがはめられる
			⑦ひもが結べる

図4 各年齢における操作時期とその実際

2-2の「個性の把握」であるが、普段子どもたちと接していない学生にとって、突然目の前に多くの子どもたちが現れれば、目の前に起こる事象を処理することに精一杯で、個々の子どもたちを一人ひとり把握するのは難しいと考えられる。個性の捉え方には種々あるが、学生に視点を与えること、視点を持って観察し記録することを課すことによって、個性の把握につながるかと考える。図5は、

担当した子どもたちを把握するためのものワークシートである。従来の保育実習日誌には、日々の生活や指導の記録のページはあったが、このような内容はなかった。このようなワークシートを設けることによって、意識して個々の子どもを見る目を養いたいと考える。ただしこのワークシートは決して子どもたち一人ひとりを完全に把握するのが目的ではなく、あくまでも見る機会や見る目

を養うためのものである。この子どもたち一人ひとりをよりよく把握するための表は、平成25年度

の保育所実習（後半）において実践し、その効果を検討する予定である。

[illegible]

図5 一人ひとりの乳幼児を把握するためのワークシート例

2-3 友達関係の理解であるが、実習生は目の前にいる子どもには目を向けられるが、子どもたちを集団として見る目はまだできていない「A君とB君はいつも一緒に遊ぶことが多い。」などと漠然と感じているに過ぎない。また、この時期の子どもたちの集団は日によって変化することが多く、とらえにくいのも特徴である。このように把握しづらい集団を捉えるために、図を用いることが有効かと考える。図6は、そのためのワークシートである。

ソシオグラムの手法を利用し、距離で親密度を、矢印で選択・非選択を表す程度のものでよいかと考える。作成することで、改めて子どもたちの人間関係や集団の関係が見えてくると考えられる。講義の中で事例を挙げ、関係図を作成する機会を設け実習において実際の関係図を作成する。この友達関係を理解するためのワークシートは、平成25年度の保育所実習（後半）において実践し、その効果を検討する予定である。

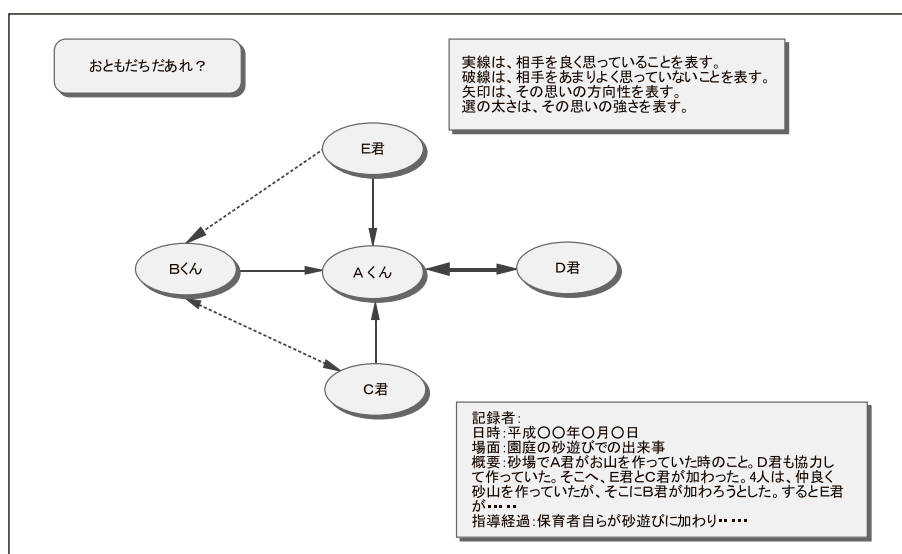


図6 人間関係を把握するためのワークシート例

3-3 指導計画については、実習に至るまでに数回しか書く機会がなく、時間的にも確保するのが厳しい状況である。また、実際の指導をイメージしながら指導計画を書くことが出来ず、単に字数合わせをしている学生も多い。また、指導計画には、それにふさわしい言葉の表現も多々あり、それにも難しさを感じている学生は多い。指導計画と実際の指導をリンクさせるためには、実際に活動を行った上で、指導計画を書かせることが最初の段階では有効かと考える。保育所の事前指導で以前は指導計画を書かせるのみであったが、その後、実際に活動を終えた後に指導計画を書かせるようになりその効果を実感している。また、保育所実習以外の実習指導でも指導計画を書く機会があるので、他の講義も含めて、効率的な指導計画の指導法の検討が必要であると考えられる。さらに、

書き上げた指導計画を学生同士で見直しさせることも自分の指導計画の不足している点を気付かせる上で、有効と考えられる。

3-2の言葉がけであるが、これは保育の対象である乳幼児の実態を把握していないと難しい。特に実習生は、一つのクラスに数日間しかいなく、個々に応じた言葉がけを要求するのは難しい。しかしながら、年齢に応じた言葉の使い方や、一般的な言葉がけはできると考えられるので、少しずつ難易度を上げてどのように言葉がけすればよいかを実例を挙げながら説明し理解させることが大切かと考える。特に、子どもを伸ばすための言葉がけが出来るように指導することが大切と考える。事例を多く取りあげながら、どのような言葉がけが良いのかを積み重ねることが有効と考えられる。

2 自己評価と他己評価

1) 自己評価と他己評価の類似性

表4は自己評価の項目別の平均であり、グラフにしたものを図7として掲げる。

表4 自己評価の項目別平均値

		自己評価
1-1	責任感	3.30
1-2	明るさ	3.72
1-3	挨拶	3.67
1-4	勤務	4.21
2-1	発達段階	2.89
2-2	個性の把握	3.05
2-3	友達関係の理解	3.07
3-1	関わり方	3.32
3-2	言葉がけ	2.70
3-3	指導計画	2.58
3-4	教材の準備等	2.79
4-1	表情の豊かさ	3.82
4-2	情緒	3.46
4-3	誠実さ	3.25
4-4	研究心	3.11

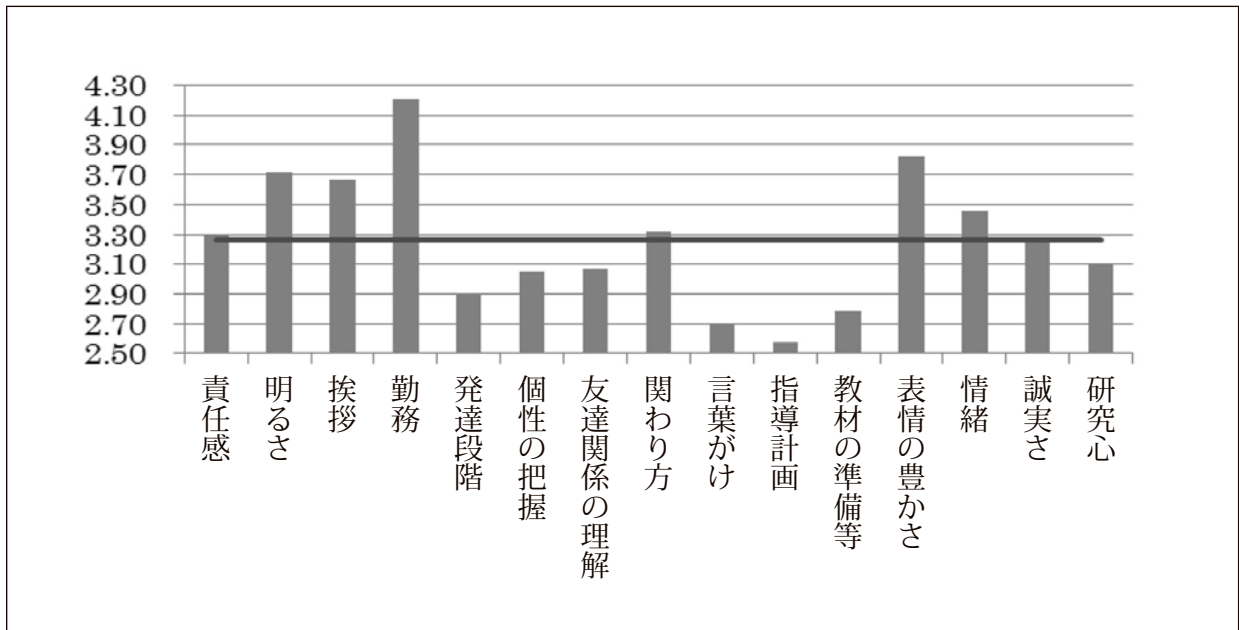


図 7 自己評価の項目別平均値

自己評価の高かった項目順に並べ替えると、1-4 勤務 4-1 表情の豊かさ 1-2 明るさ 1-3 挨拶 4-2 情緒 3-1 関わり方 1-1 責任感 4-3 誠実さ 4-4 研究心 2-3 友達関係の理解 2-2 個性の把握 2-1 発達段階 3-4 教材の準備等 3-2 言葉がけ 3-3 指導計画の順になっている。各項目の平均値は、3.26であった。平均値よりも高いものと低いものを分けたものを表5として掲げる。

表5 自己評価における平均値よりも高かった項目と低かった項目

平均値よりも高かったもの	1-4 勤務 4-1 表情の豊かさ 1-2 明るさ 1-3 挨拶 4-2 情緒 3-1 関わり方 1-1 責任感
平均値よりも低かったもの	4-3 誠実さ 4-4 研究心 2-3 友達関係の理解 2-2 個性の把握 2-1 発達段階 3-4 教材の準備等 3-2 言葉がけ 3-3 指導計画

次に、他己評価と自己評価でそれぞれ平均値よりも高かったもの及び低かったものを表6として掲げる。

表6 他己評価と自己評価における平均値よりも高かった項目と低かった項目

	他 己 評 価	自 己 評 価
平均値よりも高かった項目	1-3 挨拶 1-4 勤務 4-3 誠実さ 4-2 情緒 1-1 責任感 4-1 表情の豊かさ 3-1 関わり方	1-4 勤務 4-1 表情の豊かさ 1-2 明るさ 1-3 挨拶 4-2 情緒 3-1 関わり方 1-1 責任感
平均値よりも低かった項目	3-4 教材の準備等 4-4 研究心 1-2 明るさ 2-1 発達段階 2-2 個性の把握 2-3 友達関係の理解 3-3 指導計画 3-2 言葉がけ	4-3 誠実さ 4-4 研究心 2-3 友達関係の理解 2-2 個性の把握 2-1 発達段階 3-4 教材の準備等 3-2 言葉がけ 3-3 指導計画

自己評価について平均値よりも高かった項目及び低かった項目を4つのカテゴリー別にみると表7になる。

表7 カテゴリー別に見た平均値との比較（割合）

	平均値より高かった項目	平均値より低かった項目
実習態度	100%	0%
子ども理解	0%	100%
保育技術	25%	75%
保育者としての資質	50%	50%

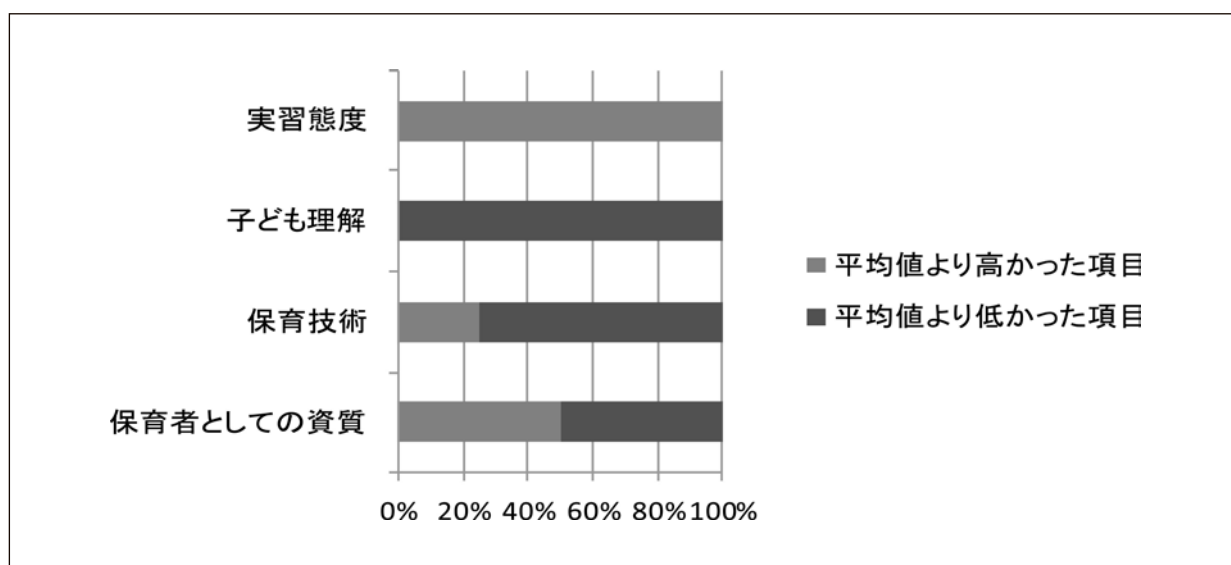


図8 カテゴリー別に見た平均値との比較（割合）

表6で他己評価と自己評価を比べると、多くの項目で一致していることがわかる。平均値よりも高かった項目で一致しているものが1-1 責任感 1-3 挨拶 1-4 勤務 3-1 関わり方 4-1 表情の豊かさ 4-2 情緒 一致しなかったものは、1-2 明るさと 4-3 誠実さであった。また、平均値よりも低かった項目で一致しているものが 2-1 発達段階 2-2 個性の把握 2-2 個性の把握 3-2 言葉がけ 3-3 指導計画 3-4 教材の準備等 4-4 研究心、一致しなかったものが、1-2 明るさと 4-3 誠実さであった。また、図7においてカテゴリー別でみると自己評価が平均値を上回ったものは、実習態度100% 子ども理解0% 保育技術25% 資質50%であった。この傾向も他己評価に類似している。この結果が

ら、多少の違いはあるものの、実習前に自己評価として低い評価を下したものが実際の評価とほぼ一致しているということがわかる。このことは、学生が実習前に準備、または学習において不足を感じている項目と実際の実習評価がほぼ一致しているということである。言い換えれば、学生は、ある程度自分の学習について正当な評価を下しているという点である。また、このことは学生が実習に行く前に抱える不安に対して、大学が十分な指導をしていないということにつながるということにもなる。前述の結果と考察1) 他己評価において、カリキュラム等を含めた実習指導の内容の改善について言及したが、学生が自信を持って実習に臨めるように早急に対応する必要がある。

2) 自己評価の傾向

各項目における自己評価と他己評価およびその差（他己評価－自己評価）を表8及び図9として掲げる。

表8 自己評価と他己評価における項目別平均値の比較

		自己評価	他己評価	差（他－自）
1－1	責任感	3.30	4.00	0.70
1－2	明るさ	3.72	3.77	0.05
1－3	挨拶	3.67	4.16	0.49
1－4	勤務	4.21	4.14	-0.07
2－1	発達段階	2.89	3.70	0.81
2－2	個性の把握	3.05	3.54	0.49
2－3	友達関係の理解	3.07	3.54	0.47
3－1	関わり方	3.32	3.84	0.53
3－2	言葉がけ	2.70	3.53	0.82
3－3	指導計画	2.58	3.54	0.96
3－4	教材の準備等	2.79	3.81	1.02
4－1	表情の豊かさ	3.82	3.89	0.07
4－2	情緒	3.46	4.04	0.58
4－3	誠実さ	3.25	4.09	0.84
4－4	研究心	3.11	3.79	0.68

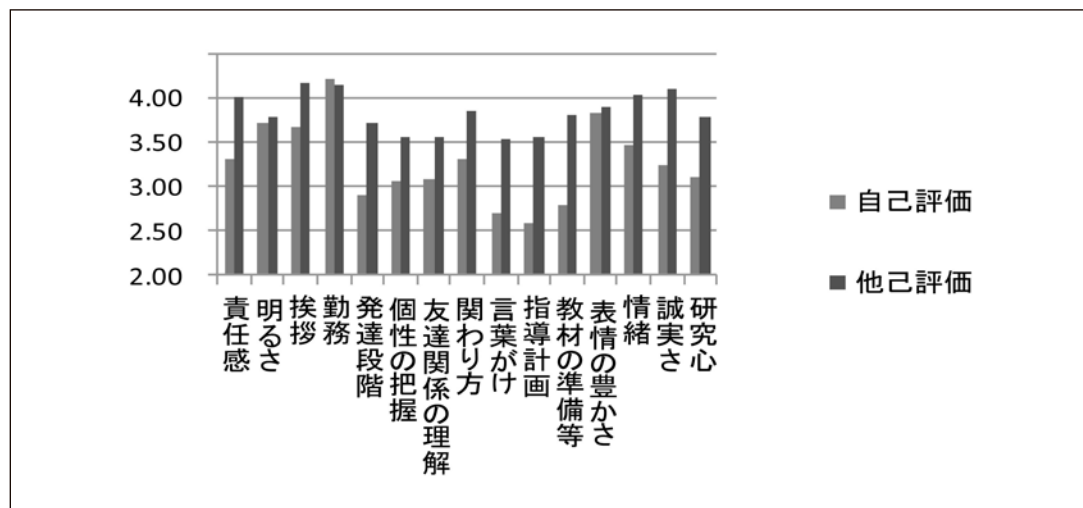


図9 自己評価と他己評価における項目別平均値の比較

表8および図9からわかるように、15の下位項目のうち勤務の項目を除いて他の項目は、すべて他己評価が自己評価を上回っている。この結果は本学の学生の傾向として自分を過少評価する傾向

があると考えられる。このことは、必要以上に実習前の不安を高める要因となりうるので、実習事前指導の段階で、自信を持たせるような言葉がけが必要と考えられる。

3) 自己評価と他己評価の下位項目についての検討

①実習態度

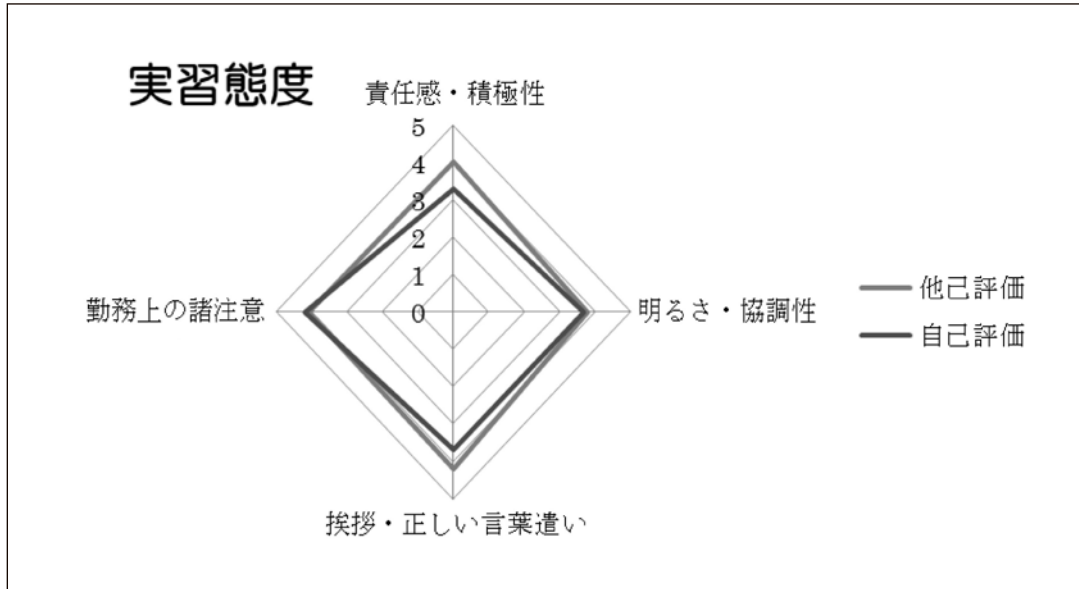


図 10 実習態度における自己評価と他己評価の比較

実習態度では、4項目中3項目で他己評価のほうが高く、1項目で自己評価が高かった。

差の大きいものから責任感・積極性 (0.70) 挨拶・正しい言葉遣い (0.49) 明るさ・協調性 (0.05) 勤務上の諸注意 (-0.07) となった。

責任感・積極性に関しては、事前指導において、実習の目的を指導する際、自分からの意欲的な関わりがない実習は意味を持たないなど、かなり厳しい指導があるため、学生も意識して積極的に実習を行った結果の表れと捉えることが出来る。また、挨拶・言葉遣いであるが、本学の学生は普段から、教職員・学生同士の挨拶が盛んで、部外者からも高く評価されている。この2項目に関しては、今までの指導の延長線上で良いかと考える。明るさ・協調性であるが、自己評価と他己評価がほとんど差が見られなかった。明るさに関しては、保育所実習の巡視の際に担当者に対して、就職希望の学生に望む項目の第1位が「明るさ」であり、保育現場の保育士が望む明るさの基準が高いものであること。また、緊張した場面での実習になるため、本来の明るさを表出しづらい場面ではあることなどが理由になっていると考えられる。緊張してなかなか自分の明るさを出せないという学生に対しては、子どもとかかわる場面から自分の明るさを出すことを促したい。また、協調性であるが、近年学生指導をしていると、保育系の学生においても友達からの干

渉を嫌ったり、自分は自分というスタンスを維持する学生が増えているような感触を持っている。保育所における保育は所長を中心にチームを組んで行うものであり、その点において協調性は必要欠くべからざるものである。学生に対し、保育は保育者個人が単独で行うものではないこと、チームの一員として、それぞれの力を発揮しその力が相乗的に作用したとき、質の高い保育が得られることをしっかりと伝える必要がある。また、大学生活の中でも学級指導（本学は、学級担任制を取り入れている）などの場面で協調性を養成することを担任が意識することが学生の協調性を身に付けるための大きな力になるかと考える。協調性を欠いた行動に対して厳しい指導することがその学生本人にとっても有用であることを意識して指導する必要があると考える。勤務上の諸注意に関しては、自己評価が他己評価を上回っており、内容としては出勤時間や退勤時間などの時間に関すること、書類の提出などが考える。本学の学生を見ていると時間の管理が若干甘いと感じられることがある。常に5分前行動の意識をもって行動するよう指導することが必要であると考えられる。また、提出物なども期限に余裕をもって提出することを習慣として身に付けさせる必要があると考える。遅れた提出物を受け取るのが、長い目で見た場合、その学生のためにならないことを我々教員は肝に銘じるべきである。

②子ども理解

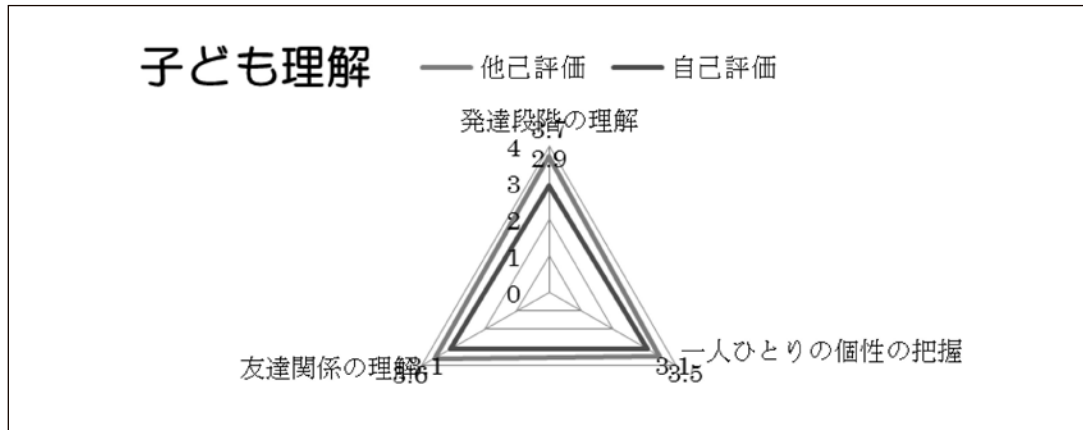


図 11 子ども理解における自己評価と他己評価の比較

子ども理解では、3項目とも他己評価が自己評価を上回っていた。差の大きいものから発達段階の理解（0.81）個性の把握（0.49）友達関係の理解（0.47）であった。

保育という事象は、相手を知ることから始まると考えられる。その意味で、保育実習生が保育対象である乳幼児に関して知識を持っているということは、必要不可欠と考えられる。しかしながら、少子化の時代、弟や妹、また親戚の子どもの世話をしたことがない学生が増えているのが現状である。したがって、乳幼児に関する知識を得るのは、主に大学ということが言える。また、乳児保育や子どもの保健などの講義で乳幼児の発達や疾病などに関して講義は受けているものの、その知識が実習で使われるという意識は少ないようである。以前事前指導の中で、2年生の4月に学生に対してのりやはさみの使用に関してその年齢を選択させたが、あまり把握していないのが現状であり、指導に工夫が必要であると感じた。ここ数年、実習事前指導の時間において発達段階に関する知識の講義を行っているが、他教科との連携も考え合わせ、乳幼児の発達に関する系統的な知識を身に付けさせるとともに、各教科担当が機会あるごとにその知識が実習や先の就職した際の保育に直接つながるということを学生に告げ、その意識を持たせるようにしなければならないと考える。

一人ひとりの個性の把握も自己評価より他己評価が上回っている。先の発達段階は、ごく一般的な発達を学ぶが、実際の子どもたちは一様ではない。発達も背景も個性もみな違う一人ひとりなのである。先にも述べたが、適切な保育をするためには、対象である乳幼児個々を把握することが必須である。一

般的な発達に関する知識を得た上の段階が個性の把握の段階であろう。保育者は、子どもを集団で捉えるとともに、その集団を構成している個々の成員についても正確に把握している必要がある。個々の把握に関しては様々な観点が必要であると考えられるが、実習生の段階では、実際に遊びなどを通して乳幼児とかかわりそのかかわりの中からその子の性格的な傾向を把握する程度かと考える。まず、名前を覚え、一日一回は、どの子にも声をかけ関係を築くなどを指導している。更に保育者になった段階では、更に客観的な視点を複数用意し、その推移に着目し、その変化を他の保育者や保護者と共有することが求められる。

友達関係の把握も自己評価を他己評価が上回っている。友達関係は、人間が社会的な生き物として社会で生きていく基礎になるものである。乳幼児の段階では、まだ、友達関係を学ぶという段階であり、そこには、保育者の適切な指導が必要となる。しかしながら実習生の段階では、実習期間が短いことなどもあり、友達関係の把握にとどまるかと考えられる。学生は、目の前に実際にいる子どもの把握や指導には熱心だが、子どもを集団としてとらえること、また、その下位集団や構成要素にまで目を向けられるものは少ない。

友達関係を簡便に把握する手立てとして、友達関係を図式化し把握する術を事前指導の中で取り入れていきたい。本来のソシオメトリーは、当事者に意見を聞き、選択、非選択などの情報を取得し、関係相関図を作成するものだが、相手が乳幼児であることや非選択をさせることの教育的意義を考えると、当事者に意見を聞くのではなく、実習生が見た

まを図式化するほうが良いのではないかと考える。そこで、ソシオメトリーの要素を取り入れ、子ども集団の位置関係を図式化し把握するにとどめたい。いったん図式化すると、次のかわりの中で、

その図式化の正当性の判断や変化がとらえやすくなる。そのことが、個々の把握にもつながると考える。この指導は保育内容（人間関係）指導法の中で行われても良いかと考える。

③保育技術

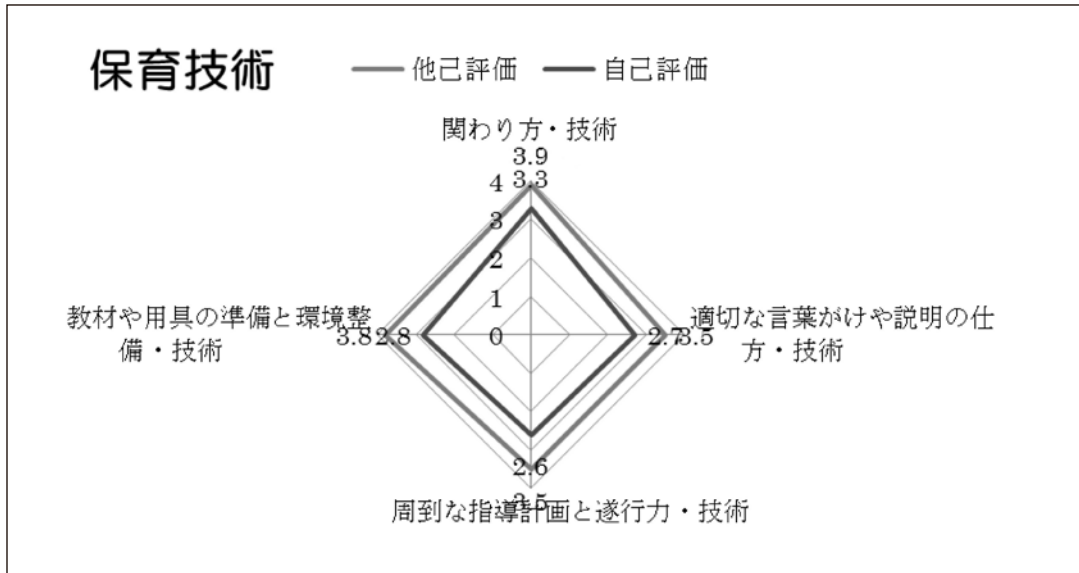


図 12 保育技術における自己評価と他己評価の比較

保育技術に関してもすべての項目で自己評価を他己評価が上回っていた。差の大きいものから教材の準備等 (1.02) 指導計画 (0.96) 言葉がけ (0.82) 関わり方 (0.53) であった。教材の準備に関しては、主に部分実習や責任実習の準備に関するものであると思われる。この項目に関しては、指導計画とも関連するが、指導計画の中に準備するものなども記載されており、学生はそれに沿って準備を進めているものと考えられる。また、実習開始前に本学図書館から多くの学生が絵本や紙芝居を借りていくという事実もある。本学図書館では、特に実習に使用されるような絵本等は複本購入したり、貸出期間を延長するなど、環境を整えている。

指導計画に関しては、幼児教育方法論等の授業の中でも指導があるが、実習事前指導の中でも実際に即した指導案作成をしている。部分実習、責任実習の指導案を一通り書き上げ、添削指導している。また、オリエンテーションが終わると、部分、責任実習の年齢が判明するので、それに沿った指導案を作成する。実習開始までには、部分、責任実習の指導案をそれぞれ一通、副案として何種類か考えていく。また、指導計画作成においては、必ず現物を実際に自分の手で作成し、必要な材料や

指導のポイントなどを把握するようにしている。学生には、できれば指導細案まで作成するように指導している。課題となるのは指導計画の系統的な指導である。各教科、各実習でそれぞれに教授している内容を相互に情報共有し系統立てて指導する必要がある。

言葉がけに関しては、現場において保育者がどのような言葉がけを乳幼児にしているかを観察しまねてみることを勧めている。しかし、この際に「なぜ、保育者がそのような言葉かけをしたのか」その言葉の裏にある保育者の意図を考えることが重要であることも伝えている。また、言葉がけをする際に大切なのは、言葉をかける対象である乳幼児がどのような状態にあるかを正確に把握することである。すなわち、保育者の言葉を単にまねすればよいというわけではなく、その必要性和意義を常に考えることを大切にしてほしいということである。ただ、あまり考えすぎて言葉をかけないのは、本末転倒なので、試行錯誤的になっても良いので、実習生として一步を踏み出すよう励ましている。

説明の仕方に関しては、指導計画などの場合は、実際に自分で作って、難しい点などを把握しているので、相手の立場に立って言葉を考えることが出来

るのかと考える。

関わり方に関しては、担当の子どもには、一日一回は直接声をかけ関わり、特定の子どものかかわりにならないようにすること。子どもの視線に合わせかかわることなどを指導している。いずれにせよ、子どもとかかわる際に、精神性を子どものレベルにまで下げる一瞬をもっても良いが、常にその背景に保育者としての視点を忘れないようにすることを指

導している。

保育技術に関しては、指導計画や準備などは、大学の事前指導で多くをカバーできると考えられるが、子どもとの関わり方や言葉がけなどは現場の保育者から学ぶことが多いかと考える。このことを学生に伝え、現場でしか学べないことの一つであることを意識してよく学ぶように伝えることも有効であると考ええる。

④ 保育者としての資質

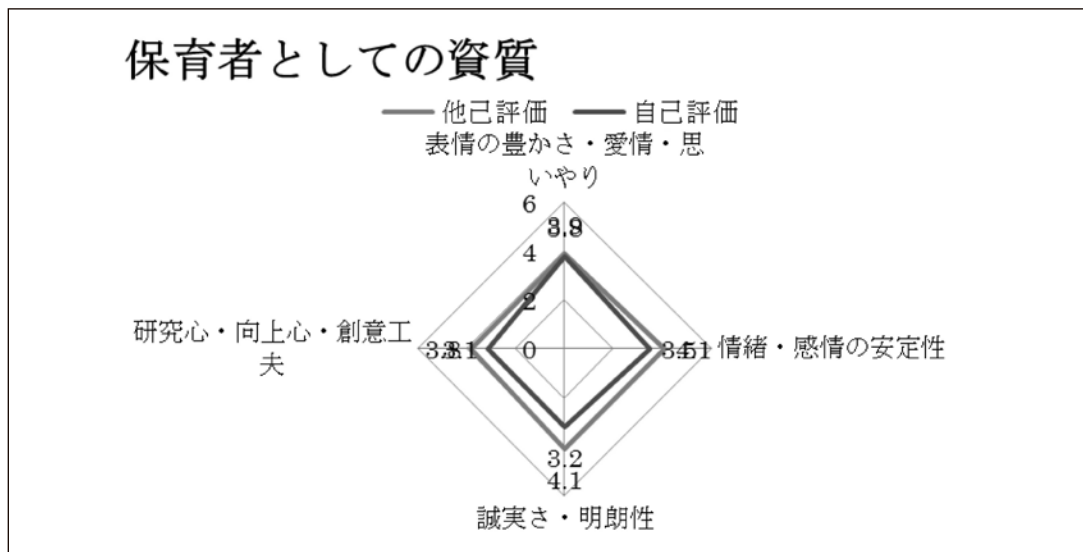


図 13 保育者としての資質における自己評価と他己評価の比較

保育者としての資質に関してもすべての項目に関して自己評価を他己評価が上回った。差の大きいものから誠実さや明朗性(0.84)研究心、向上心や創意工夫(0.68)情緒、感情の安定性(0.58)表情の豊かさや子どもへの愛情、思いやり(0.07)であった。

表情の豊かさや子どもへの愛情であるが、乳幼児期は特に感情が分化し、情緒が発達する時期である。この時期に周りにいる大人がどのような対応をするかによってその発達が大きく影響を受けることをしっかりと伝え、実習生といえどもその一翼を担っているという責任感を持ち、表情豊かに接することを促したい。また、表情の表出など本人が思っているより控えめであることが多い。子どもは、小さな表情の変化を捉えることは苦手であり、乳幼児の周りにいる大人は、少し大げさに感情表出を心がける必要がある。このことも伝える必要がある。

IV. 結論

今回保育所実習に対する評価について自己評価と他己評価の比較検討を行った。その結果、学生は各評価項目に対しておおむね正当な評価を下していることが分かった。すなわち、将来の保育士として今の自分に不足しているものなどを把握しているということが分かった。そのことは、現時点における本学の実習指導における弱点を明らかとした。特に「子ども理解」と「保育技術」のカテゴリーである。「子ども理解」や「保育技術」に関しては、保育士の成長過程として、現場に出るから実際に子どもとかかわることを通して経験を積み学び身に付けていくものではある。しかし学生のうちにその基礎を培うことは可能かと考える。子どもを捉える視点を与え、見る目を養うことを事前指導において学ぶことも可能である。今回、新たな試みとして、「どんな子がいるかな?」「おともだちだあれ?」をワークシートとして提案した。また、指導案を学生相互に検討させることも

提案した。これらの試みがより充実した実習指導及び実習につながることを期待したい。

参考文献

- 1) 松本学. 教育実習・保育実習における学生自己評価と幼稚園評価・保育所評価の比較考察. 国際学院埼玉短期大学研究紀要. 2007, 28, p.63－72.
- 2) 斉藤葉子, 大木みどり. 実習の事前・事後指導に関する研究(V)－保育実習における1・2年次生の不安意識とその問題について－. 羽陽学園短期大学紀要. 2008, 8(2), p.183－202.
- 3) 相浦雅子ほか. 保育所実習における学生の自己評価の在り方について. 別府大学短期大学部紀要. 2011, 30, p.75－84.
- 4) 山田朋子, 那須信樹, 森田真紀子. 保育所実習における学生の自己評価からみた実習指導内容の検討—大学・短期大学学生の評価結果の分析を通して—. 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要. 2010, 42, p.225－236.
- 5) 前徳明子. 保育実習の評価に関する研究. 小池学園研究紀要 創刊号 2009, p.83－96. 83－96
- 6) 亀井 聡. 保育実習における実習生の自己評価に関する考察. 新島学園短期大学紀要2007, 27, p.133－145.
- 7) 原孝成. 保育所実習における園評価と自己評価の関係. 西南女学院大学紀要 2006, 10, p.196－203.
- 8) 佐野美奈. 保育所実習（保育実習Ⅰ）における実習評価に関する一考察—現場評価と自己評価の比較分析を通して—. 大阪樟蔭女子大学 The Human Science Research Bulletin 2008,7, p.131－147.

付記

この論文は、平成23年度全国保育士養成協議会研究大会においてポスター発表したものに加筆修正したものである。